



Osaka Gakuin University Repository

Title	ケネス・G・B・デュワーとジウトランド論争(1) Kenneth G. B. Dewar and the Jutland Controversy (1)
Author(s)	山口 悟 (YAMAGUCHI SATORU)
Citation	大阪学院大学 国際学論集 (INTERNATIONAL STUDIES), 第 30 巻第 1・2 号 : 1-29
Issue Date	2019.12.31
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

ケネス・G・B・デュワーとジウトランド論争(1)

山 口 悟

Kenneth G. B. Dewar and the Jutland Controversy (1)

YAMAGUCHI SATORU

ABSTRACT

Kenneth Gilbert Balmain Dewar is known as the co-author of 'Naval Staff Appreciation of Jutland' (hereafter cited as NSAJ). NSAJ had been completed in 1921 but was not published because it included harsh criticism on John R. Jellicoe who had commanded the Grand Fleet in the Battle of Jutland in 1916. The Admiralty was concerned that NSAJ would intensify the controversy about the Battle of Jutland.

However, NSAJ had a great influence on the Jutland Controversy. *Narrative of the Battle of Jutland* was published as the Admiralty official account of the Battle of Jutland in 1924. That was the expurgated version of NSAJ. Besides, Winston Churchill wrote *The World Crisis*, vol.3 by reference to NSAJ and on Kenneth Dewar's advice.

NSAJ was heavily influenced by Dewar's critical thinking about British naval doctrine, training and education system, and so on. To Dewar, Jellicoe was an embodiment of the Royal Navy's organization and system which Dewar had criticized. And also, Dewar had hold antipathy to Jellicoe through his personal experience in his naval career. Given his thinking and real experience, Dewar had enough background to criticize Jellicoe.

Dewar's personality, intellectual, but uncompromising, also influenced the harsh criticism of Jellicoe. Such his personality had also had an adverse effect on his naval career. In 1928, that was a contributing factor in the Royal

Oak incident, in which Dewar had come into conflict with his superior officer. Dewar had produced NSAJ living up to the expectations of David Beatty, the former First Sea Lord, and unwillingly retired from the Navy after the Royal Oak incident under the new First Sea Lord, Charles Madden. Madden had been on very familiar terms with Jellicoe and felt a repulsion toward NSAJ. It may be said that Kenneth Dewar was one of the victims who suffered through the Jutland controversy.

目 次

はじめに

1. ケネス・デュワー

A. ケネス・デュワーの経歴

B. ケネス・デュワーの人物像とその海軍についての考察および主張

2. ジウトランド海戦とジウトランド論争

A. ジウトランド海戦の概要

B. ジウトランド論争

(以上本号)

3. 「海軍幕僚評価」

A. 艦隊決戦の戦略的意義

B. ジウトランド海戦での指揮・用兵と大艦隊海戦要務令

C. 戦艦隊の戦闘隊形への展開方法

D. ビーティーとジェリコーへの認識の差異

4. ケネス・デュワーのジウトランド論争との関わりとその背景

おわりに

はじめに

第一次世界大戦最大の海戦である1916年のジウトランド（Jutland）海戦において、イギリス海軍はドイツ海軍の撃滅に失敗した。大戦後にイギリス海軍省により進められたジウトランド海戦公式記録の作成作業は、それが不満足な海戦結果の責任の所在を示唆するものとなりえたがゆえに難航する。これを契機として海軍内外でジウトランド海戦の結果責任をめぐる論争、いわゆるジウトランド論争が1920年代を中心に展開されることになる。

ジウトランド論争は、ジェリコー（John Rushworth Jellicoe）やビーティー（David Richard Beatty）などジウトランド海戦を司令官として戦った海軍軍人たち、またハーパー（John Ernest Troyte Harper）やコーベット（Julian Stafford Corbett）など、その海戦の公式記録作成に関わった者たちの人生や評価に影を落とした。「ジウトランド海戦についての海軍幕僚による評価報告（Naval Staff Appreciation of Jutland）」〔以後は基本的に「海軍幕僚評価」と略記〕の共編者であるケネス・デュワー（Kenneth Gilbert Balmain Dewar）も、そうした影響を受けた人物の一人である¹⁾。

海軍省によるジウトランド海戦の公式記録は、1924年に公表の『ジウトランド海戦報告（*Narrative of the Battle of Jutland*）』であるが、それは「海軍幕僚評価」の部分削除・修正版であった²⁾。「青年トルコ人（Young Turks）」と称される海軍改革派グループの一人として知られるケネス・デュワーは、軍令部長ビーティーの信任のもとに、「海軍幕僚評価」を作

1) 本稿では、「ジウトランド海戦についての海軍幕僚による評価報告」の基本テキストとして、大英図書館所蔵ジェリコー文書第54に所収の下記史料を利用する。以下においては文書名を「海軍幕僚評価」と略記する。[C.B.0938] Naval Staff Appreciation of Jutland (with Appendices and Diagrams), Copy No.7 (hereafter cited as NSAJ), Jellicoe Papers, vol. 54, Add MS 49042. これに加えて、下記に所収の「海軍幕僚評価」テキストも補足的に参照する。William Schleichauf and Stephen McLaughlin, eds., *Jutland: The Naval Staff Appreciation* (Barnsley: Seaforth Publishing, 2016).

2) *Narrative of the Battle of Jutland* (H.M.S.O., 1924) (hereafter cited as *Narrative*).

成した。この文書はジュトランド論争に影響を及ぼし、デュワーの名を知らしめることにもなったが、それは彼の人生に幸いしたようにはみえない。

本稿は、ケネス・デュワーを視角として「海軍幕僚評価」を検討する。彼と「海軍幕僚評価」との関係を通して、ジュトランド論争における「海軍幕僚評価」の位置づけを考え、そしてまたジュトランド論争が関係者に及ぼした影響をかいまみたいと思う。

なお、本稿でデュワーとはケネス・デュワーを意味し、人物の軍階級は各文章当時のものとする。

1. ケネス・デュワー

A. ケネス・デュワーの経歴

ケネス・デュワーは1879年にスコットランドで生まれた。1893年に海軍に入り、兵学校〔訓練施設・練習艦ブリタニア (HMS Britannia)〕で2年間の教育・訓練を受けた。兄アルフレッド (Alfred Charles Dewar) など彼の兄弟も、海軍軍人の道を歩んでいる³⁾。

1895年にデュワーは士官候補生 (Midshipman) として地中海艦隊 (Mediterranean Fleet) の防護巡洋艦ホーク (HMS Hawke) に乗組み、翌年には海峡艦隊 (Channel Fleet) の戦艦マグニフィセント (HMS Magnificent) へ配属となった。その後、練習戦隊のコルベットであるヴォラージ (HMS Volage) へ移り、1899年に少尉 (Sub-Lieutenant) へと昇進した⁴⁾。

3) ケネスの兄アルフレッド (1876-1969) は大佐に、ジュトランド海戦で戦艦ハーキュリーズ (HMS Hercules) に乗組んでいた弟アラン (Alan Ramsay Dewar, 1887-1972) は少将まで昇った。もう一人の弟ジェームズ (James Forest Dewar, 1881-1942) も海軍に入ったが、軍務に適さず第一次世界大戦中に少佐で退役となった。'Alan Ramsay Dewar,' and 'James Forest Dewar,' *The Dreadnought Project*, <http://www.dreadnoughtproject.org/tfs/index.php/Alan_Ramsay_Dewar> and <http://www.dreadnoughtproject.org/tfs/index.php/James_Forest_Dewar>.

4) Issue 27172, *The London Gazette*, 9 Mar. 1900, p. 1630. デュワーの自伝では1900年とされているが、1899年の誤りであろう。Kenneth Gilbert Balmain Dewar, *The Navy from Within* (London: Victor Gollancz, 1939), p. 42.

さらにグリニッジ、ポーツマスの教育・訓練施設で課程を修め、1900年に大尉（Lieutenant）へと昇進したデュワーは、デヴォンポート小艦隊（Devonport Flotilla）の駆逐艦オスプレイ（HMS Osprey）、同じく駆逐艦ファーヴェント（HMS Fervent）、演習参加のため駆逐艦シャーク（HMS Shark）と短期間に乗艦を変えている⁵⁾。次に彼は東インド戦隊（East Indies Station）所属の二等巡洋艦マラソン（HMS Marathon）乗組みとなり、義和団事件に対応すべく中国へも分遣されたが、到着のころにはもう大勢は決していた。マラソンはインド洋へと帰還し、セイロンやペルシア湾などで活動した⁶⁾。

1901年からデュワーはグリニッジで、さらにポーツマスの砲術学校で砲術の専門課程に学び、優秀な成績を修めて、以後、砲術士官の道を歩んでいくことになる⁷⁾。1903年の演習の際には、駆逐艦マーメイド（HMS Mermaid）において早くも初の艦長職を経験している。

その後、デュワーは、シーアネス（Sheerness）砲術学校に要員として配属となった。ここで彼は、概ね午後4時までに仕事が終わるという職場環境ゆえの余暇時間を利用して自学自習に励み、海軍を狭い技術面からのみではなく作戦面からみる広い視野を養うとともに、海軍の教育・訓練面の改善を志向するようになっていった。こうした変化には、王立防衛研究所（Royal United Service Institution）の1903年金賞論文を著述した兄アル

本稿でのケネス・デュワーの経歴についての記述は、基本的に上記自伝と、補足的に下記ガーディナーの研究による。Leslie Gardiner, *The Royal Oak Courts Martial* (Edinburgh; London: William Blackwood & Sons, 1965), chap. 5, pp. 64-88.

- 5) Dewar, *Navy from Within*, p. 48.
- 6) クウェートに停泊中のマラソンには、クウェートの首長ムバラク（Mubarak bin Sabah Al-Sabah）とともに、当時彼の保護下にあった、のちの初代サウジアラビア国王イブン・サウド（Abdulaziz bin Abdulrahman bin Faisal Al Saud）が訪問している。Ibid., p. 55.
- 7) Barry Dennis Hunt, *Sailor-Scholar: Admiral Sir Herbert Richmond 1871-1946* (Waterloo, Ontario: Wilfrid Laurier University Press, 1982), p. 29. ポーツマスのホエール島（Whale Island）にある砲術学校は、HMSエクセレント（HMS Excellent）、またはポーツマス砲術学校とも称された。

フレッドの知的活動や日露戦争への関心が刺激になっていたという⁸⁾。

1904年の演習で再び駆逐艦マーメイドを指揮したあと、デュワーは海峡艦隊の装甲巡洋艦ケント (HMS Kent) の砲術士官に任命された。一時、予備に配された後、ケントは中国戦隊 (China Station) 配属となって1906年には香港へと進んだ。デュワーは中国戦隊にある間に、旅順やウラジオストック、また、たびたび日本にも訪れている。日本では江田島の海軍兵学校を訪ね、東京で東郷平八郎大将との会話の機会を得たりするなど日本海軍と交流をもち、それらの経験はイギリス海軍の教育・訓練や指揮統制面の改良について彼が思考を深める糧となった⁹⁾。

デュワーは、装甲巡洋艦ケントにて砲撃能力向上に成果を残して評判も得た¹⁰⁾。次いで彼は1908年にポーツマス砲術学校付となったあと、本国艦隊 (Home Fleet) の戦艦プリンス・ジョージ (HMS Prince George) 乗組みとなった¹¹⁾。そこでも彼の砲撃能力改善への貢献が認められている¹²⁾。

このころ彼は日本海軍に関する知見をかわれて、それについて海軍大学 (Royal Naval War College) で講義する機会をもっている。しかし、海軍省改革につながる話へ至ったときに校長のローリー (Robert Swinburne Lowry) 少将により、「海軍大学は海軍省の批判をする場ではない」として、中断させられたという¹³⁾。

8) Dewar, *Navy from Within*, pp. 68-69. アルフレッド・デュワーの金賞論文は下記のものである。Lieutenant A. C. Dewar R.N., "In the Existing State of Development of Warships, and of Torpedo and Submarine Vessels, in What Manner Can the Strategical Objects, Formerly Pursued by Means of Blockading an Enemy in His Own Ports, Be Best Attained?," *Journal of the Royal United Service Institution*, vol. 48-314, 315 (Apr. and May 1904).

9) Dewar, *Navy from Within*, pp. 78-80, 84-85, 88-89, 90-96.

10) *Ibid.*, pp. 72-74, 81, 87-90, 97-99; Gardiner, *Royal Oak Courts Martial*, pp. 71-72.

11) "Naval and Military Intelligence," 15 Jan. 1908, *The Times* (London), p. 8.

12) Dewar, *Navy from Within*, p. 104; Gardiner, *Royal Oak Courts Martial*, p. 72.

13) Dewar, *Navy from Within*, pp. 104-107; Gardiner, *Royal Oak Courts Martial*, pp. 73-74; Hunt, *Sailor-Scholar*, p. 29. ハントはこの講義を1909年のこととしているが、1908年ではないかと思われる。この講義内容は、海軍省批判ととられうる部分を削除したうえで文書化され、海軍部内で回覧されることになった。これに対し、南極探検での悲劇的最期で知られるスコット (Robert Falcon Scott) 大佐からも手紙にて好意的反応がデュワーに伝えられている。

デュワーは、またポーツマス砲術学校付となったのち、1909年に海峡艦隊の戦艦コモンウェルス (HMS Commonwealth) に乗組んだ¹⁴⁾。次いで短期間のポーツマス砲術学校付と演習での防護巡洋艦スパルティエイト (HMS Spartiate) 配属を経て、砲術演習監察官 (Inspectors of Target Practice) のパース (Richard Henry Peirse) 少将の幕僚に任命された¹⁵⁾。彼はマルタ島などに向向いて各艦隊の砲撃能力改善にあたっている。

1910年にデュワーは、革命的戦艦として有名な戦艦ドレッドノート (HMS Dreadnought) 乗組みとなり、艦長のハーバート・リッチモンド (Herbert William Richmond) 大佐と親交を結んで、以後、彼に親炙することになる。リッチモンドは海軍改革を志して活動し、のちには海軍史家として名を馳せることになるイギリス海軍の代表的知性派軍人であった。なおデュワーは、配属されて早々に偽エチオピア皇族がドレッドノートを視察訪問するという事件 (Dreadnought Hoax) に遭遇している¹⁶⁾。

1911年に中佐 (Commander) へ昇進したデュワーは、ポーツマスの海軍大学の教官に配された。そこで彼は海軍戦術の研究を進め、長大な単縦陣ではなく艦隊を数個の分艦隊 (Division) に分けての柔軟な分艦隊戦術 (Divisional Tactics)、下級指揮官の指揮権限の拡大とその自発的指揮の重視等の戦術思考を強めるようになっていった。本国艦隊で演習を観察した経験などから、そうした戦術の望ましさを彼は考えるようになったとい

14) "Naval and Military Intelligence," 12 Dec. 1908, *The Times* (London), p. 4; Gardiner, *Royal Oak Courts Martial*, p. 74. 自伝では戦艦コモンウェルス配属が1909年の末とされているが、誤りであろう。デュワーの自伝には、いくつか時期の表記に混乱がみられる。Dewar, *Navy from Within*, p. 107.

15) "Naval and Military Intelligence," 14 June 1909, *The Times* (London), p. 8; Dewar, *Navy from Within*, pp. 111-12.

16) Dewar, *Navy from Within*, pp. 120-21. ドレッドノート欺瞞事件 (Dreadnought Hoax) である。ホレス・ド・ヴィアー・コール (William Horace de Vere Cole) を首謀者とする6人がエチオピア皇族一行に変装して戦艦ドレッドノートを訪問し、その後、事の顛末を『デイリー・ミラー (*The Daily Mirror*)』紙などへ知らせたため、海軍は面目を失った。偽エチオピア皇族の一行に扮した者のなかには、のちの作家ヴァージニア・ウルフ (Adeline Virginia Woolf) であるヴァージニア・ステイヴン (Stephen) も含まれていた。参照、種村季弘『詐欺師の楽園』(岩波書店、2003年)、8～21頁。

う¹⁷⁾。また、彼は対独戦を想定した海軍戦略にも関心を深めて、仮想敵国ドイツに対する遠隔封鎖の検討を進め、それは王立防衛研究所の1912年金賞論文に結実した¹⁸⁾。

1912年に海相ウィンストン・チャーチル (Winston Leonard Spencer Churchill) の主導で海軍参謀部 (Admiralty War Staff) が成立した。これに伴い海軍大学に設置されることになった参謀課程 (War Staff Course) の内容整備にデュワーは関わったが、専門技術面に偏重した課程内容には不満だった¹⁹⁾。

このころリッチモンドの主導下に、海軍の諸問題に関する思考を深め、海軍改革の基となる組織をつくろうとする動きが生じ、これにデュワーも参画した。1912年10月にリッチモンド、デュワー、レジナルド・プランケット (Reginald Aylmer Ranfurly Plunkett) 中佐など、海兵隊将校を含む7人が第1回会合をおこなって海軍協会 (The Naval Society) が設立されることになり、翌年2月には会誌『海軍評論 (*The Naval Review*)』第1巻第1号が出版された²⁰⁾。この会合参加者は、そのうち4人がデュ

17) Dewar, *Navy from Within*, pp. 121-24, 133-38.

18) *Ibid.*, pp. 144-52. デュワーの1912年金賞論文は下記のものである。Commander K. G. B. Dewar R.N., "What Is the War Value of Oversea Commerce? How Did It Affect Our Naval Policy in the Past and How Does It in the Present Day?," *Journal of the Royal United Service Institution*, vol. 57-422 (Apr. 1913).

この論文の最終章は具体的な作戦構想を取り扱っているがゆえに、海軍省の意向により出版されなかった。この未公表部分は、彼の自伝に付録 (Appendix I: Naval War Plan) として収録されている。Dewar, *Navy from Within*, pp. 371-81.

19) Dewar, *Navy from Within*, pp. 152-54. 参謀課程の設置については下記を参照。Harry Dickinson, *Wisdom and War: The Royal Naval College Greenwich 1873-1998* (Farnham: Ashgate, 2012), pp. 109-10; Andrew Lambert, "The Naval War Course, Some Principles of Maritime Strategy and the Origins of 'the British Way in Warfare'," in *The British Way in Warfare: Power and the International System, 1856-1956*, eds. Keith Neilson and Greg Kennedy (Farnham: Ashgate, 2010), pp. 246-49.

20) この会合の参加者は以下の7名である。リッチモンド大佐、デュワー中佐、プランケット中佐、トーマス・フィッシャー (Thomas Fisher) 大尉、ヘンリー・サースフィールド (Henry George Thursfield) 大尉、ロジャー・ベレアーズ (Roger Mowbray Bellairs) 大尉、エドワード・ハーディング (Edward W. Harding) 海兵隊大尉。以上の者にヘンダーソン (William Hannam Henderson) 大将 [退役] を加えた8名が、この会の創設者に数えられる。James Goldrick, "The Founders," in *Dreadnought*

ワーも関わって設置された参謀課程の受講者であり、彼が中心に選んだ者たちといえた²¹⁾。『海軍評論』の刊行は現在に至るまで継続されているが、第一次世界大戦の開始以降には、その内容が機密に触れる恐れありとして海軍省による出版停止や検閲も経験している²²⁾。

デュワーは、1913年の演習の際、一時的に本国艦隊司令長官キャラハン（George Astley Callaghan）大将の幕僚として戦艦ネプチューン（HMS Neptune）に乗艦した。その後、海軍大学から転じて、第二艦隊の戦艦プリンス・オブ・ウェールズ（HMS Prince of Wales）の副長に任じられた²³⁾。

1914年に、デュワーは海軍参謀部長（Chief of the Admiralty War Staff）のスターディー（Frederick Charles Doveton Sturdee）中将から、参謀部で彼を補佐してくれないかとの誘いを受けた。デュワーも大いに乗り気であったが、結局、これは実現をみなかった。彼は、この不成就を海軍大学での元同僚による妨害のためと考えている²⁴⁾。

1914年7月末にデュワーはガートルード・ステープルトン・ブレサートン（Gertrude Mary Stapleton-Bretherton）と結婚した²⁵⁾。結婚式での花婿介

to Daring: 100 Years of Comment, Controversy and Debate in the Naval Review, ed. Peter Hore (Barnsley: Seaforth Publishing, 2012), pp. 1-11.

各人の階級はThe Naval Reviewホームページ (<https://www.naval-review.com/about-the-naval-review/>) に基づいているが、デュワーの自伝では、トーマス・フィッシャーを中佐、サースフィールドを少佐とし、また、この会合出席者としてベレアーズの名が抜け落ちている。Dewar, *Navy from Within*, p. 155n.

21) Dewar, *Navy from Within*, pp. 154-55; Goldrick, "The Founders," p. 1; idem, "The Irresistible Force and the Immovable Object: The Naval Review, the Young Turks, and the Royal Navy, 1911-1931," in *Mahan Is Not Enough: The Proceedings of a Conference on the Works of Sir Julian Corbett and Admiral Sir Herbert Richmond*, eds. James Goldrick and John Brewster Hattendorf (Newport, Rhode Island: Naval War College Press, 1993), p. 87.

22) Dewar, *Navy from Within*, pp. 203, 263-64. 『海軍評論』の展開については下記を参照。Goldrick, "The Irresistible Force."

23) Gardiner, *Royal Oak Courts Martial*, p. 77.

24) Dewar, *Navy from Within*, pp. 159-60.

25) デュワーの妻の姉イヴリン（Evelyn Mary Stapleton-Bretherton）は、結婚によりワールシュタット公妃となり、第一次世界大戦中のドイツでの体験を記した『ベルリンのイギリス人妻（*An English Wife in Berlin* [1920]）』の作者として知られる。

添人はプランケット中佐が務めることになっていたが、大戦勃発直前の状況により彼は休暇をとれず参会できなかった。

1914年8月に第一次世界大戦がはじまると、デュワーの乗る戦艦プリンス・オブ・ウェールズも海峡艦隊に所属して大陸派遣軍の輸送防護などの任務に就き、翌年にはダーダネルス (Dardanelles) 作戦のため地中海へと派遣された。上陸部隊を支援すべき艦砲射撃の不十分な展開をみて、デュワーは観測員を派出しての間接砲撃を提案したが、その即座の採用はみられなかった²⁶⁾。プリンス・オブ・ウェールズは、イタリア参戦後にはその支援のため、タラントを拠点とすることになった。

1915年秋にデュワーはデヴォンポート砲術学校の長となり、イギリス海軍予備員 (Royal Naval Reserve) やイギリス海軍志願予備員 (Royal Naval Volunteer Reserve) を含む将兵の訓練にあたった²⁷⁾。翌年に彼は、ドーバー哨戒隊 (Dover patrol) のモニターのマーシャル・ネイ (HMS Marshal Ney)、次いでヤーマス防衛にあたるモニターのロバーツ (HMS Roberts) を指揮した²⁸⁾。

1917年5月に軍令部長ジェリコーの呼び出しを受けてデュワーは海軍省に入り、作戦課 (Operations Division) に配属となって、戦時内閣のための戦況の週間評価報告書を作成する任務に就いた。同年7月には作戦課に計画班たる第16班 (Section 16) が設置され、その業務にも彼はあたることになる。第16班は積極策を望む戦時内閣の圧力のもとに、攻勢計画を検討、策定すべく設置されたものであった。実はデュワーは、その設置より少し前に首相ロイド・ジョージ (David Lloyd George) と昼食をともにして海軍省改革などを論じる非公式な機会を与えられており、それも第16班設置に影響していたかもしれない²⁹⁾。

26) Dewar, *Navy from Within*, pp. 183-85.

27) デヴォンポート砲術学校は、HMS ヴィヴィッド (HMS Vivid) とも称された。

28) ロバーツでは、『闇の奥 (*Heart of Darkness*)』などの作品で知られる小説家ジョゼフ・コンラッド (Joseph Conrad) の来訪を受けている。Dewar, *Navy from Within*, pp. 211-12.

29) Dewar, *Navy from Within*, pp. 230-31; Hunt, *Sailor-Scholar*, p. 71; Arthur Jacob Marder, *From the Dreadnought to Scapa Flow* (hereafter cited as *FDSF*), vol.4 (London, New

彼自身の見解も含む週刊評価報告書は幾度もの修正を強いられてデュワーは不満に感じていたが、8月に修正前のものが海相ゲッデス（Eric Campbell Geddes）の目に届く機会を得て彼の意見を知らしめることができた。その後、デュワーは週間評価報告書の作成任務を解かれることになって喜んだものの、突然に東インド戦隊の防護巡洋艦サファイア（HMS Sapphire）への転属を指示された。まだ海軍省に入って3か月程での異動であり、彼はこれを左遷だと感じた³⁰⁾。週間評価報告書の内容やそこのデュワーの提案について軍令部長ジェリコーは度々異議を唱えて修正を命じており、自身の考えを表明するデュワーはジェリコーに疎まれていたと感じていた。この異動に反発したデュワーは人を介して首相に働きかけ、海相にも面談して、その取り消しに成功した³¹⁾。

9月に第16班は作戦課から独立して計画課（Plans Division）となり、デュワーもそこに所属することになった。当時、最も喫緊の課題はドイツ潜水艦による通商破壊戦への対策であった³²⁾。しかし、ジェリコーは船団護衛（Convoy）方式の採用問題などで首相と海相の信頼を得られず、1917年末に軍令部長を解任され、それを軍令部次長だったウィームズ（Rosslyn Erskine Wemyss）中將が後継することになった。こうした変化

York, Toronto: Oxford University Press, 1969), p. 195.

第16班設置の背景には、リッチモンドの首相ロイド・ジョージへの影響もあった。デュワーは、大戦前の参謀組織についての講義からロイド・ジョージに名が知られたのかもしれないとしているが、リッチモンドを通して知られていたのかもしれない。Gardiner, *Royal Oak Courts Martial*, pp. 78-79.

30) Dewar, *Navy from Within*, pp. 221-24; Arthur Jacob Marder, *Portrait of an Admiral: The Life and Papers of Herbert Richmond* (London: Jonathan Cape, 1952), p. 267.

防護巡洋艦サファイアは、そのときボイラー故障でコロンボ港に留まったままの状態であったという。Hunt, *Sailor-Scholar*, p. 71.

31) Dewar, *Navy from Within*, pp. 224-25. デュワーはこの異動を回避すべく、妻に手紙をもたせて、首相友人の教育院政務官ハーバート・ルイス（John Herbert Lewis）に働きかけた。

32) デュワーは大艦隊（Grand Fleet）所属の駆逐艦や潜水艦等を利用した積極的な対潜作戦を構想していたが、戦力や即応性の低下を嫌う大艦隊側は、それに否定的だった。Hunt, *Sailor-Scholar*, pp. 77, 88; Marder, *FDSF*, vol. 4, p. 290. cf. Dewar, *Navy from Within*, pp. 233-38.

の下、デュワーは1918年に計画課長補 (Assistant Director of Plans) となる。

3月末にデュワーは大艦隊 (Grand Fleet) 司令長官だったビーティー大将心得と初めて面談する機会を得ている³³⁾。その後、アドリア海における作戦に関するローマでの会議にイギリス海軍代表として参加した。6月末に彼は大佐へと昇進した。

第一次世界大戦終結後、1919年にデュワーはイギリス代表団の一員としてパリ講和会議に参加し、のちこの功勞により大英帝国勲章 (CBE) を受勲した。講和会議の機会に彼は、大戦中のアラブ反乱 (Arab Revolt) での活躍で有名なトーマス・ロレンス (Thomas Edward Lawrence) 大佐に出会い、強い印象を受けている³⁴⁾。

このころ大戦による中断から再始動していた海軍大学 (Royal Naval College) にあったドラックス (Reginald Aylmer Ranfurly Plunkett-Erle-Drax) 大佐から、そこでの勤務に誘われてデュワーは喜んだが、結局、それは実現しなかった³⁵⁾。この折に彼は、自主独立した思考をなすという自らの評判が軍歴の上での障害をもたらしていると感じたという³⁶⁾。さらに彼が関わった計画課の人事問題のこじれから、デュワーは黒海で白軍支援にあたっていた旧式巡洋艦グラフトン (HMS Grafton) の艦長へと異動させられそうになった。結局、この左遷の動きは計画課長のフラー (Cyril Thomas Moulden Fuller) 大佐や軍令部次長のおかげもあって回避できたものの、この苦い経験がデュワーに海軍での将来に疑問を抱かせ、退役を考えさせるようになった。1920年に、彼はとりあえず休職 [半給]

33) Dewar, *Navy from Within*, pp. 244-45; Hunt, *Sailor-Scholar*, p. 88.

34) Dewar, *Navy from Within*, pp. 254-56, 62. 元来は考古学者であって軍人ではないロレンスの活躍は、デュワーにとって、戦史研究を軽視し、自ら考える姿勢を育まない海軍の教育・訓練の不備を反省させる一例となった。

35) プランケットは1916年に母の遺産とともに、Ernle-Erle-Draxの姓も受け継ぐことになり、Reginald Aylmer Ranfurly Plunkett-Erle-Erle-Draxとなった。本稿でも1916年以後は彼をドラックスとする。

36) Dewar, *Navy from Within*, p. 256. cf. Robert L. Davison, "Striking a Balance between Dissent and Discipline: Admiral Sir Reginald Drax," *The Northern Mariner/Le Marin du Nord*, 13-2 (Apr. 2003), pp. 48-49.

という選択に至る³⁷⁾。

こうした状況下に、当時、海軍省の訓練・幕僚業務課 (Training and Staff Duties Division) にあった兄アルフレッドより求められたのが、「ジユトランド海戦についての海軍幕僚による評価報告」作成作業への参加であった³⁸⁾。この「海軍幕僚評価」は1921年末に完成するが、それとケネス・デュワーとの関わりについては後述する。

のち1922年にデュワーは、北アメリカ・西インド戦隊 (North America and West Indies Station) の軽巡洋艦カルカッタ (HMS Calcutta) 艦長に任命され、北米、カリブ海方面の各地を任務で訪問している。同年夏にカルカッタは戦隊司令官パケナム (William Christopher Pakenham) 大將の旗艦とされた。1923年にデュワーは同戦隊の軽巡洋艦ケープタウン (HMS Capetown) に乗艦を移して指揮を執ることになった。メキシコでのデ・ラ・ウエルタ (Felipe Adolfo de la Huerta Marcor) の反乱事件に際しては、1924年に戦隊司令官ファーガソン (James Andrew Fergusson) 中將の指示を仰ぐことなく製油所のあったミナティラン (Minatitlan) に進出して、英米国民の保護にあたった³⁹⁾。

1924年にデュワーは海軍大学の戦争課程 (War Course) を受講した。彼は海軍大学に勤務する期待をもっていたが、実現しなかった⁴⁰⁾。翌1925年には海軍省にもどって情報課次長 (Deputy Director of the Naval Intelligence) に就任し、些末な問題処理に忙殺されがちな業務の改善に努めている⁴¹⁾。

1927年にデュワーは地中海艦隊第1戦艦戦隊旗艦の戦艦ロイヤル・オー

37) Dewar, *Navy from Within*, pp. 257-58, 264; Hunt, *Sailor-Scholar*, p. 106.

38) アルフレッド・デュワーは1917年に情報課、1918年以降には訓練・幕僚業務課に属して海軍省にあった。1918年に大佐に昇進し退役。のち1926年から1948年まで戦史班の長を務めた。'Alfred Charles Dewar,' *The Dreadnought Project*, <http://www.dreadnoughtproject.org/tfs/index.php/Alfred_Charles_Dewar>.

39) Dewar, *Navy from Within*, pp. 290-92. 当初、ファーガソン中將は未測量の水路を通っての進出をよくは思わなかったが、のちにデュワーの自発的行動を追認したという。

40) *Ibid.*, p. 296.

41) *Ibid.*, pp. 296-97.

ク (HMS Royal Oak) 艦長に就任した。彼は戦隊の副司令官コラード (Bernard St. George Collard) 少将と正常な関係を築くことができず、ロイヤル・オーク副長のダニエル (Henry Martin Daniel) 中佐とともに、コラードと対立する状況に陥った。デュワーとダニエルがコラードの言動に抗議する書面を上官へ呈したことをきっかけに問題が大きくなり、彼らは軍法会議にかけられるまでに至った⁴²⁾。このロイヤル・オーク事件は、社会に注目され、新聞や議会でもとり上げられた⁴³⁾。デュワーは自らの正当を強く主張したが、一部有罪とされて譴責された。しかし、彼は、コラードとダニエルが退役に追い込まれたのとは違って、まだしばらくは現役でありつづけることになった。

1928年秋にデュワーは砲術訓練任務にあった巡洋戦艦タイガー (HMS Tiger) の、翌1929年には同様の戦艦アイアン・デューク (HMS Iron Duke) の艦長に任じられた。また海軍侍従武官 (Naval Aide-de-Camp) にも任命された。しかし、同年、少将に昇進して退役⁴⁴⁾。結局、デュワー

42) ロイヤル・オーク事件については下記を参照。Ibid., pp. 312-54; Gardiner, *Royal Oak Courts Martial*; Robert Glenton, *The Royal Oak Affair: The Saga of Admiral Collard and Bandmaster Barnacle* (London: Leo Cooper, 1991); Hunt, *Sailor-Scholar*, pp. 172-75.

43) 議会でこの問題を取り上げた保守党の庶民院議員カーライオン・ベレアーズ (Carlyon Wilfroy Bellairs) 中佐 [退役] はリッチモンドの古くからの友人であったことから、ともに彼との友人関係でつながるデュワーとベレアーズが連携し、故意に報道界を刺激して社会にこの事件を知らせ、海軍省を動揺させようとしているという噂が生じた。第二次世界大戦後、地中海艦隊司令長官としてロイヤル・オーク事件に関わったキース (Roger John Brownlow Keyes) 元帥の伝記がアスピノール・オグランダー (Cecil Faber Aspinall-Oglander) により著されたが、そこにこの噂が記載されていたことから、デュワーはそれを事実無根として名誉棄損を訴え、裁判において彼の主張が認められている。ちなみに、「青年トルコ人」の一人であったケンウォーシー (Joseph Montague Kenworthy) は、ロイヤル・オーク事件当時、労働党庶民院議員であり、ベレアーズと同じくその事件を議会でとり上げている。ケンウォーシーは、のちの第10代ストラボギー男爵 (Baron Strabolgi) である。Cecil Faber Aspinall-Oglander, *Roger Keyes: Being the Biography of Admiral of the Fleet Lord Keyes of Zeebrugge and Dover* (London: Hogarth Press, 1951), p. 305; Gardiner, *Royal Oak Courts Martial*, pp. 223-24, 242-45; Hunt, *Sailor-Scholar*, pp. 173-74.

44) ケンウォーシーはデュワーのために首相や海相へ働きかけをおこなったが、彼の退役は避けられなかった。Hunt, *Sailor-Scholar*, p. 175.

は、ロイヤル・オーク事件の影響から逃れることができなかった。

のち、デュワーは1931年の総選挙に労働党候補として出馬したが、落選した⁴⁵⁾。彼は、海軍軍縮が展開された戦間期において、主力艦の小型化を主張している⁴⁶⁾。1934年に中将〔退役〕に昇進。1939年には自伝 (*The Navy from Within*) を出版した。

第二次世界大戦では、兄アルフレッドのもとで海軍省の訓練・幕僚業務課戦史班に勤務した。第二次世界大戦後もデュワーの知的活動は衰えず、ダーダネルス作戦やジウトランド海戦についての論説を『海軍評論』に寄稿するなど海軍問題について見解表明をつづけている⁴⁷⁾。1964年に死去。

B. ケネス・デュワーの人物像とその海軍についての考察および主張

経歴からうかがえるように、デュワーは知性と行動力を兼ね備えた海軍軍人であった。兄アルフレッドやリッチモンドに影響を受けて、ケネス・デュワーも作戦・戦略面での考究をおこない、たとえば王立防衛研究所の1912年金賞論文にその成果をみることができる。また海軍協会の結成と『海軍評論』にも関わるデュワーは、リッチモンドには及ばなかったとしても、当時のイギリス海軍を代表する知性派軍人の一人であった。

デュワーの知的活動には、それに基づいた積極的行動が伴っていた。砲術士官として装甲巡洋艦ケント等で砲撃能力向上に貢献し、「青年トルコ人」の一人として第一次世界大戦以前から海軍改革運動にも関わり、大戦中の海軍省では攻勢計画を提言している⁴⁸⁾。「青年トルコ人」グループは1917年から首相ロイド・ジョージに接触するなどして海軍省の改革を促

45) デュワーは次回の選挙にも立候補を考えていたが、対立する保守党候補に、かつての上官であったキース元帥が出馬したことで立候補をとりやめたという。次回選挙ではキースが勝利した。Gardiner, *Royal Oak Courts Martial*, pp. 226-28; Glenton, *Royal Oak Affair*, pp. 169, 171; Hunt, *Sailor-Scholar*, pp. 208-209.

46) "Opening of Navy Week To-Day: Exhibition of Pictures in London," 5 Aug. 1933, *The Times* (London), p. 15; Gardiner, *Royal Oak Courts Martial*, p. 228.

47) Kenneth Gilbert Balmain Dewar, "Battle of Jutland," I-III, *The Naval Review*, 47-4, 48-1, 2 (Oct. 1959, Jan. and Apr. 1960); idem, "The Dardanelles Campaign," I-III, *ibid.*, 46-2, 3, 4 (Apr., July and Oct. 1957); Gardiner, *Royal Oak Courts Martial*, p. 230.

48) Hunt, *Sailor-Scholar*, pp. 77, 87; Marder, *Portrait of An Admiral*, pp. 303-304.

し、ジェリコーの軍令部長解任にも影響を与えたが、デュワー自身も首相と会談して海軍省の現状と改革の必要を訴えている⁴⁹⁾。また、彼は、メキシコでのデ・ラ・ウエルタの反乱の際には司令官の指示を待たずに行動して積極果断を示している。

デュワーは外見上、静かで目立たない、控えめな、または印象の薄い人物であったともいわれる。しかし、知性的であるがゆえにか、自ら恃むところの厚い、反権威主義的で、知性に劣ると思う者に対し尊大な態度で接する狭量な性格をもつ、傲慢で自信過剰な不平家とみられがちであったことも否定できない⁵⁰⁾。その彼の性格と姿勢、そして自主独立した知性に基づいた積極的行動が、海軍改革運動において反発も惹起し、彼の軍歴の上で障害を招く一因ともなって、ついにはロイヤル・オーク事件での挫折につながったということもできよう。そうした彼の人生で負の方向に反作用した出来事のなかに、反発を招いた「海軍幕僚評価」の作成も含まれるだろう。

デュワーは、海軍の教育・訓練に最も関心を置いており、自伝でも「海軍を去るにあたって心からの唯一の後悔は、士官の教育・訓練に実際の影響を及ぼしたいとの願いがかなわなかったことである」と述べている。彼は10代半ばでの海軍入り以来、グリニッジなど各種施設で教育・訓練を受け、また教官としてもそれに関わってきたが、特に砲術士官としての専門教育を受けて以降、海軍の教育・訓練へ批判的な目を向けるようになったという⁵¹⁾。第一次世界大戦中にも、彼は海軍省にあって教育・訓練面での改革を説いていたようである⁵²⁾。デュワーは、その面における欠陥が第一

49) Robert L. Davison, *The Challenges of Command: The Royal Navy's Executive Branch Officers, 1880-1919* (Farnham: Ashgate, 2011), pp. 238-45; Hunt, *Sailor-Scholar*, pp. 62-67.

50) Gardiner, *Royal Oak Courts Martial*, pp. 68, 82-83; Glenton, *Royal Oak Affair*, pp. 20-21; Goldrick, "The Founders," p. 9; Arthur Jacob Marder, *From the Dardanelles to Oran: Studies of the Royal Navy in War and Peace 1915-1940* (London; New York: Oxford University Press, 1974), pp. 58-59; idem, *FDSF*, vol.4, p. 135; idem, *FDSF*, vol.5 (London, New York, Toronto: Oxford University Press, 1970), p. 299; Schleihauf and McLaughlin, eds., *Jutland*, p. 244.

51) Dewar, *Navy from Within*, p. 355.

52) Marder, *Portrait of An Admiral*, pp. 277-78.

次世界大戦での海軍の苦戦へと影響したと考えていた。

デュワーの批判の要点は、上官と規則への服従を当然とする抑圧された環境下に与えられる専門技能育成に偏重した教育・訓練が、海軍士官の創造性や積極性・自発性（initiative）の成長を阻害し、権限と情報を独占する高級指揮官の独断により機能する、過度の中央統制（over-centralisation）を特性とした組織に海軍を陥らしめているというものである⁵³。これが戦術思想面では、艦隊司令官により単独で指揮・統制される単縦陣を基礎に置く硬直した艦隊戦術につながっている。また上官が絶対的・独断的存在となって、情報や権限を分有すべき参謀組織の発展を阻害しており、この参謀組織の欠陥・未熟もまた、司令官に権限が集中する過度の中央統制につながっているのであった⁵⁴。さらに戦史研究の不十分・軽視が、戦略・作戦構想面での不備をもたらしている。デュワーは、士官の主要責務たる指揮に関係した、責任負担を伴う実践的教育訓練が中心とされるべきであり、技術的能力と同様に資質と知性の育成が教育・訓練において重視されるべきであると主張している⁵⁵。

彼の批判のなかで「海軍幕僚評価」を考えるにあたって関係ある点を、少し詳しくみていきたい。彼の批判は、海軍の教育・訓練の最初から、つまり、その入隊時期にも向けられている。兵学校の入校時期が10代半ばと早すぎ、規則に囲まれた抑圧的環境が早くから若者の独立性、創造性、自ら考える能力を委縮させてしまう⁵⁶。それ以後の諸施設での教育・訓練においても傾向は同じで、その内容も海軍士官としての実践的知識とは遠い専門技術面に偏重しており、試験重視、暗記中心の詰め込み教育の形態は思考力の育成を妨げている。

53) 海軍の教育・訓練等に対するデュワーの批判や改革の提言は、彼の自伝の中の至るところにみられるが、特にその第25章「改革の基礎（Basis of Reform）」において集中的に述べられている。Dewar, *Navy from Within*, pp. 14-26, 43-47, 57-65, 79-80, 94, 102-103, 109-12, 122-24, 129-33, 152-54, 163-64, 184, 204, 207-208, 212, 225-26, 232, 254-56, 259-60, 270-71, 274-75, 278-81, 284-86, 293-295, 355-67.

54) Schleihauf and McLaughlin, eds., *Jutland*, pp. 248-49.

55) Dewar, *Navy from Within*, pp. 361-65.

56) *Ibid.*, pp. 14-19, 358.

また教育施設外の訓練でも、単調な日常的任務に没入するばかりで、責任ある任務が与えられていない。この結果、自ら判断し行動するという積極性・自発性や自立心が涵養されずに、ただ規則や命令に服従するだけの、受動的で、柔軟な知性に乏しい、習慣的に変革と自主的思考へ反感を感じるような保守的な士官が生み出されている。海軍に入ってから28歳に至るまでの間に公式な海軍教育の期間が11年も存在し、責任ある海上任務にはおよそ2つしか就くことができない。長すぎる専門技術偏重の教育・訓練は早期に実践経験を得る機会を奪い、かえって海軍士官に不可欠な資質・能力と知性の涵養を阻害し、経験不足ゆえの海上任務での危険と非効率率をもたらしている⁵⁷⁾。

以上のような教育・訓練の在り方は、上官・命令への盲目的服従と上意下達を軸とした過度の中央統制を特性とする海軍組織を生み出すことにつながっている。そして、上官への意見具申が反抗的態度とみなされ報復的措置によって報われるという海軍の組織風土は、改革の実現を阻害するものである⁵⁸⁾。

海軍組織における過度の中央統制は下級指揮官への権限移譲を妨げ、もとより教育・訓練によって下級指揮官にも積極性・自発性が育成されていないので、結果として柔軟な戦術展開は不可能である。この海軍の組織および教育・訓練の本質的特性とその所産である士官たちと共存する戦術思想が、単縦陣での並航戦という硬直した艦隊戦構想である⁵⁹⁾。情報を独占して最高指揮官が独断専行する中央統制の強い指揮統制形態と、下級指揮官の裁量と自発性を認めない単縦陣での並航戦という戦術思想は相互に結合した存在なのであった。

デュワーは、敵艦隊が、特に劣勢のそれが自軍の思うように単縦陣での

57) *Ibid.*, pp. 293, 358-59.

58) *Ibid.*, pp. 225-26, 249, 258; Marder, *From the Dardanelles to Oran*, p. 58.

海軍における法と処罰の執行についても海軍教育において知らしめられるべきとデュワーが述べるのは、ロイヤル・オーク事件の経験も影響しているのかもしれない。Dewar, *Navy from Within*, pp. 130, 357.

59) デュワーの艦隊戦戦術についての見解は下記を参照。Dewar, *Navy from Within*, pp. 122-24, 133-38, 204-205.

並航戦を採用するはずはないので、硬直した単縦陣での艦隊戦闘ではなく、1805年のトラファルガー（Trafalgar）海戦にみられるような、一個の艦隊を数個の部隊に分け、下級指揮官も権限をもって各部隊を指揮し、そのような各部隊が独立的かつ有機的に共同戦闘を展開する分艦隊戦術を適切なものと主張した。それを実現するためにも、下級指揮官の自発性・積極性を圧殺し、最高指揮官のもとにすべてが集中される過度の中央統制を生み出す海軍の教育・訓練の在り方が変えられねばならないのであった。

また、参謀組織の不備も、デュワーの批判点だった⁶⁰。海軍の高級指揮は参謀組織の欠如、また欠陥によって損なわれているが、情報を上官が独占し、その上官がすべてを独断的に指令するという過度の中央統制の下で、上官の有する情報と権限を分有してこそ効果的に機能する参謀組織は育成されえない⁶¹。

たしかに第一次世界大戦前から海軍参謀部の編成・整備がなされていたが、中央統制の強い組織のなかでは、独断専行の立場にある軍令部長など高級指揮官に些細な問題も含めて多大な業務が集中する。そうした状態に圧倒されて、さらなる作業量の増加を意味する改革の方策の実施に自然と反発する傾向が海軍省に生じ、それが護送船団方式採用への抵抗の背景となったのではないか⁶²。また、中央統制に慣れて、日々の業務に没入専心するのみの士官たちでは、大局観をもちえず、先を見すえて戦争計画を構想することはできない。参謀部はあっても、それに適切な資質を有する参謀の適材が育成されておらず、その機能的活動が阻害されている。デュ

60) デュワーの参謀組織関連についての見解は下記を参照。*Ibid.*, pp. 102-103, 139-43, 152-54, 157-58, 170-71, 183, 229, 248-50, 258-59, 261-62.

兄のアルフレッド・デュワーは、ドイツの参謀本部組織について詳しく、その導入支持者だった。アルフレッドとケネスのデュワー兄弟は、教育や組織の問題について、陸軍改革で知られる政治家・哲学者のホールデン（Richard Burdon Haldane）と彼の邸宅で語り合っていたという。*Ibid.*, pp. 139-40.

61) たとえば、アガディール危機のときに軍令部長であったウィルソン（Arthur Knyvet Wilson）元帥は、1900年代半ばに海峡艦隊司令長官を務めたが、部下と情報共有や協議をすることなく、その副司令官のムーア（Arthur William Moore）中將にも作戦計画について何も語っていなかったという。*Ibid.*, p. 75.

62) *Ibid.*, pp. 227-28.

ワーによれば、「ワインがなければ、瓶は役には立たない」のであった⁶³⁾。改良されていったとはいえ、第一次世界大戦を通して参謀組織の機能は満足なものではなく、その改善には海軍の教育・訓練の改革が必須だとデュワーは感じていた⁶⁴⁾。

専門技術面ばかりが重視されて、戦史研究に基づいた作戦・戦略面の教育が貧弱であることも、適切な海軍戦略や戦術構想の実現を阻害している⁶⁵⁾。実際、デュワーの批判と変革の主張は戦略面にも及び、第一次世界大戦を前にして、彼は対独戦略として遠隔封鎖 (Distant Blockade) を提言している⁶⁶⁾。第一次世界大戦前のイギリス海軍の対独戦略の基軸はドイツを海上封鎖して圧迫するというものであった。しかし、機雷や魚雷という水雷兵器の実用化と進歩が著しい状況下に、ドイツ海岸近くに進出しての近接封鎖 (Close Blockade) はあまりにも危険が大きいため、第一次世界大戦が近づくにつれてイギリス海軍の対独戦略は、近接封鎖や、もう少し距離を置いた、いわゆる監視封鎖 (Observational Blockade) から、大戦直前にはスコットランドとノルウェー間、そして英仏海峡を封鎖して北海にドイツを封じ込めるという遠隔封鎖策へと移行していった⁶⁷⁾。デュワーの王立防衛研究所1912年金賞論文は、この遠隔封鎖を主張するものであり、イギリス海軍によるその採用と何らかの関係があったのかもしれない⁶⁸⁾。デュワーは、ドイツ方面に近づいての封鎖よりも、北海の出入口を

63) *Ibid.*, p. 229.

64) *Ibid.*, pp. 248-50.

デュワーは、第一次世界大戦後の海軍省の官僚主義的非効率にも批判的で、その職務権限の不明確、部署の機能や業務割当の重複、人材配置の不适当、それゆえの決定の遅さなどを批判し、海軍軍人と民間事務官の役割分担の明確化や部局再編による効率化、また業務習熟のための海軍省勤務期間の長期化という改革を自伝で主張している。*Ibid.*, pp. 298-306.

65) *Ibid.*, pp. 123, 129-33, 262. cf. Lambert, "The Naval War Course," pp. 248-49.

66) デュワーの遠隔封鎖構想については下記を参照。Dewar, *Navy from Within*, pp. 144-52, 371-81.

67) 通説の1914年7月ではなく、グライムスは遠隔封鎖への移行を、それより早期であるとしている。Shawn T. Grimes, *Strategy and War Planning in the British Navy, 1887-1918* (Woodbridge: Boydell Press, 2012), pp. 177-79.

68) Dewar, *Navy from Within*, pp. 150-51; Grimes, *Strategy and War Planning*, pp. 179-81. 自伝においてデュワーは、海軍のとった遠隔封鎖策は自らの構想を模したものだとして述べている。

封鎖して自国の通商路を防護しつつ敵経済を圧迫する防御的戦略、つまりは遠隔封鎖こそ、敵艦隊を艦隊決戦に誘い出す方法だと考えていた⁶⁹⁾。敵主力艦隊はまた、その潜水艦による通商破壊戦を背後から支える存在でもあると彼は認識していた⁷⁰⁾。

以上のようなデュワーの考察と主張は、たとえば教育・訓練面での欠陥や、それによる下級指揮官の自発性・積極性の欠如、参謀組織の不備、過度の中央統制や装備・技術面への偏向に対する批判等、多くがリッチモンドやドラックスなど他の「青年トルコ人」たちの主張と重なるものである⁷¹⁾。しかし、とりわけデュワーは、それを「海軍幕僚評価」において強く表明する機会をもつことになったのであった。

2. ジュトランド海戦とジュトランド論争

「海軍幕僚評価」を検討する前に、まずはジュトランド海戦とジュトランド論争の展開について概観したい。

A. ジュトランド海戦の概要

戦力的に劣勢なドイツ海軍が1916年5月末にイギリス海軍の一部戦力を誘引してその撃破を図ろうとし、主力艦隊である大海艦隊 (Hochseeflotte) を出撃させたことでジュトランド海戦は誘発された⁷²⁾。その意図は不明な

69) Dewar, *Navy from Within*, pp. 147, 372; idem, "What Is the War Value of Oversea Commerce?," pp. 457-60.

70) Dewar, *Navy from Within*, p. 235.

71) [Reginald Aylmer Ranfurly Plunkett-Erle-Drax], "Jutland or Trafalgar," *The Naval Review* 13-2 (May 1925); Davison, "Striking a Balance," pp. 54-55; Hunt, *Sailor-Scholar*, chaps. 1-2. デュワーは自らの教育・訓練に関する考えの多くが、リッチモンドの主張と重なるものだとしている。Dewar, *Navy from Within*, p. 355.

72) ジュトランド海戦の展開については主に下記を参照。John Brooks, *The Battle of Jutland* (Cambridge: Cambridge University Press, 2016); Julian Stafford Corbett, *Naval Operations*, vol. 3 (London: Longmans, 1923); Andrew Gordon, *The Rules of the Game: Jutland and British Naval Command* (1996; London: John Murray, 2005); Arthur Jacob Marder, *FDSF*, vol. 3: *Jutland and After, May to December 1916*, 2nd ed. (Oxford: Oxford University Press, 1978).

がらドイツ艦隊の出撃を探知したイギリス海軍も、主力艦隊である大艦隊を出撃させたのである。5月31日午後には艦隊前衛である両軍の巡洋戦艦隊がデンマーク沖で接触して海戦は開始されるが、英独ともに敵艦隊主力である戦艦隊の存在を予期しておらず、英独主力艦隊同士の衝突は予想外のものであった。

ジウトランド海戦の展開は、以下の4段階に分けることができる。

「南への追撃 (Run to the South)」: 5月31日午後2時20分ごろに両軍は接触し、ピーティー中將の指揮する優勢なイギリス海軍巡洋戦艦隊がヒッパー (Franz Ritter von Hipper) 中將率いるドイツ巡洋戦艦隊を追撃する。後退する独巡洋戦艦隊は、後方の主力戦艦隊への英巡洋戦艦隊の誘引を企図していた。英巡洋戦艦隊が追撃に入る際、臨時に戦艦隊から巡洋戦艦隊に編入されていたエヴァン・トーマス (Hugh Evan-Thomas) 少將率いる第5戦艦隊の転針が遅れ、ために英巡洋戦艦隊の戦力集中は不完全なものとなった。この「南への追撃」の段階で英巡洋戦艦インディファティガブル (HMS Indefatigable) とクイーン・メリー (HMS Queen Mary) が相次いで爆沈する。

「北への後退 (Run to the North)」: ドイツ巡洋戦艦隊を追撃するイギリス巡洋戦艦隊は、午後4時30分ごろにシェーア (Reinhard Scheer) 中將率いるドイツ大海艦隊主力である戦艦隊を発見する。英巡洋戦艦隊は即座に反転して自軍主力の戦艦隊のもとへ大海艦隊を誘引しようとした。英巡洋戦艦隊は、いまや優勢なドイツ大海艦隊の追撃を受けることになったが、このときも第5戦艦隊は転針が遅れたために、敵の激しい攻撃下に陥ることになった。

英独主力戦艦隊の会敵: イギリス巡洋戦艦隊を追撃してきたドイツ大海艦隊は、ジェリコー大將率いるイギリス大艦隊主力の戦艦隊と午後6時ごろに接触する。大艦隊戦艦隊は戦闘隊形である単縦陣へと展開するが、それにあたり、より敵に接近する形となる西寄りの右翼先行展開ではなく、利点も多いが敵に遠ざかる形となる左翼先行展開をおこなって戦闘を開始した。劣勢となった大海艦隊は離脱を図り、大艦隊がそれを追撃する。英巡洋戦艦インヴィンシブル (HMS Invincible) が爆沈。追撃するジェリ

コーは、脱出を図るドイツ大海艦隊の雷撃に対し大艦隊を退避させるなど慎重な艦隊指揮をおこなった。なお、午後7時ごろに巡洋戦艦隊が360度旋回（32 point turn）をなしたことも、のちのジウトランド論争の一争点となる。

夜戦：夜戦を避けつつ、翌日の戦闘再開を期してイギリス大艦隊はドイツ大海艦隊を追跡する。軽艦艇による戦闘が断続的に生じるも、結局、大海艦隊は大艦隊の後方をすり抜けてドイツへの帰還を果たした。

この海戦ではイギリス海軍の損害の方が大きく、巡洋戦艦3隻を含む各種14隻、戦死6094名など。ドイツ側の損害は巡洋戦艦1隻を含む各種11隻、戦死2551名であった。しかし、イギリス海軍はドイツ海軍主力を撃滅できなかったとはいえ、北海にドイツ海軍が閉塞される戦略状況とイギリスの海上優勢に変化は生じなかった。

B. ジウトランド論争

第一次世界大戦中よりイギリスでは大戦の公刊戦史作成の動きが始まっており、帝国防衛委員会（Committee of Imperial Defence）の指示のもと、その海軍戦史部分である『海軍作戦（*Naval Operations*）』⁷³⁾が海軍史家コーベットにより著述され、大戦終結後に順次刊行されていくことになった。1914年末のフォークランド（Falkland Islands）沖海戦までをあつかう第1巻が1920年に、ダーダネルス攻撃などをあつかう第2巻が翌年に刊行され、次いでダーダネルス作戦とジウトランド海戦をあつかう第3巻が準備されることになった。

海軍省においても、大戦の戦訓を抽出して海軍の専門的要請に応えるべく、独自の戦史記録・研究文書が1919年以降に順次作成されていく。その作業の一翼を担ったのが、ケネス・デュワーの兄アルフレッドの提案により、大戦終結後の1918年に士官教育に資する大戦の史資料を作成するため

73) Julian Stafford Corbett, *Naval Operations*, vol. 1, 2 (London: Longmans, 1920, 1921). 1922年のコーベットの急死後、1923年に第3巻は出版された。その後、事業を引き継いだヘンリー・ニューボルト（Henry John Newbolt）により、1928年に第4巻が、1931年に第5巻が刊行された。

訓練・幕僚業務課への設置が承認された戦史班 (Historical Section) であった⁷⁴⁾。そこで作成される資料は、高級将校や教育・訓練部門による部内での使用を目的とし、基本的に批評的な内容をもつものではなかった。しかし、この流れの中から、大いに批評的内容をもつ「海軍幕僚評価」が生み出されることになった。

また、それら部内利用のための大いに専門的な資料とは別に、一般公開を前提としたジュトランド海戦記録の作成も進められることになった。ジュトランド海戦には早くから議会や社会の関心が強く向けられてきており、その公式記録作成と公表が求められていたのである⁷⁵⁾。

1919年2月に軍令部長ウィームズからハーパー大佐に、各種文書資料のみに基づいた、批判や解釈を含まないジュトランド海戦記録の作成が指示された。このいわゆるハーパー・レコード (Harper Record) は10月には完成したが、このころ新たに軍令部長に就任したビーティーがその内容に修正を求め、これにハーパーが抵抗して、その最終的完成の目途がたたなくなつた。ために1920年9月にはハーパー・レコードの公表は断念され、

74) 海軍省における第一次世界大戦の戦訓研究は、技術分野の研究 (Technical History) と幕僚分野の研究 (Naval Staff History) の種別があった。後者は海軍省の訓練・幕僚業務課戦史班が管轄し、いずれも退役軍人であるアルフレッド・デュワー、オズワルド・タック (Oswald Thomas Tuck)、ロイド・オーウエン (J.H. Lloyd-Owen) が、その主な担い手であった。Alfred Charles Dewar, "The Necessity for the Compilation of a Naval Staff History," *Journal of the Royal United Service Institution*, vol. 66-463 (Aug. 1921), pp. 374-77; Hunt, *Sailor-Scholar*, p. 112; Marder, *From the Dardanelles to Oran*, pp. 60-61.

第一次世界大戦以前より海軍部内に史資料を取り扱う部局を設置する動きは存在した。海相チャーチルの提案から1914年に海軍参謀部の戦史班 (History Section of the Naval War Staff) が設置されることになったが、大戦勃発という緊急事態下に実体化せず、結局、2名の海軍士官がコーベットにより著作される公式海軍大戦史のための史資料収集を帝国防衛委員会のもとでおこなうことになった。Peter K. Kemp, "War Studies in the Royal Navy," *Journal of the Royal United Service Institution*, vol. 111-642 (May 1966), pp. 151-52.

75) ジェリコーによる回顧録『大艦隊 (The Grand Fleet, 1914-1916: Its Creation, Development and Work [London: Cassell, 1919])』の執筆を知った軍令部長ウィームズが、それによるジュトランド海戦にまつわる問題の惹起を懸念したことも、海軍省が公式記録作成に動いた背景にあった。Alfred Temple Patterson, *Jellicoe: A Biography* (London: Macmillan, 1969), p. 230.

それは『海軍作戦』第3巻を執筆するコーベットの資料として提供されることになった。なお、1920年12月には『ジウトランド海戦1916年5月30日～6月1日：付録付公式文書集（*Battle of Jutland 30th May to 1st June 1916: Official Despatches with Appendices*）』⁷⁶⁾が公表されたが、これはジウトランド海戦に関わる報告書や航路図、信号記録などを集成したものにすぎなかった。

ハーパー・レコードが挫折する一方、海軍省では「ジウトランド海戦についての海軍幕僚による評価報告」の作成が進められることになった。1920年11月に海軍省の訓練・幕僚業務課長エラートン（Walter Maurice Ellerton）大佐を通して、この作業を指示されたのがケネス・デュワーの兄であるアルフレッド・デュワー大佐〔退役〕であった⁷⁷⁾。ケネス・デュワーによれば、兄アルフレッドが「海軍幕僚評価」の作成を依頼されたのは、オックスフォード大学で歴史学を修め、またドイツに詳しいという彼の素養ゆえにであった⁷⁸⁾。しかし、その兄でも砲術や戦術の問題に満ちたジウトランド海戦を扱うのは難題に感じられたため、その分野に見識深い弟ケネスに助力を求めたというのである。このデュワー兄弟の「海軍幕僚評価」編者としての選定は、軍令部次長のブロック（Osmond de Beauvoir Brock）中將によりなされたが、そこにはビーティーの意向が働いていたようである⁷⁹⁾。「海軍幕僚評価」の作成作業には、ハーパー・レコードの作成に参加したジョン・ポーレン（John Francis Hungerford Pollen）大尉も

76) *Battle of Jutland 30th May to 1st June 1916: Official Despatches with Appendices*, Cmd. 1068 (H.M.S.O., 1920).

77) Schleihau and McLaughlin, eds., *Jutland*, p. xxii.

78) Dewar, *Navy from Within*, pp. 265-66, 267. デュワーによれば、ハーパー・レコードが未公表となったのは、一般人には理解不能な内容であったためだという。

79) Stephen Wentworth Roskill, *Admiral of the Fleet Earl Beatty: the Last Naval Hero: An Intimate Biography* (London: Collins, 1980), p. 332.

ハントによれば、ハーパー・レコードの図表資料の全面的再検討に取り組むべくケネス・デュワーが選任されたが、それは皮肉にもコーベットの推薦によるものであった。そのときコーベットは、「海軍幕僚評価」につながったハーパー・レコードの全面的見直し作業の進行には気づいていなかったという。Hunt, *Sailor-Scholar*, p. 114; Donald Mackenzie Schurman, *Julian S. Corbett 1854-1922: Historian of British Maritime Policy from Drake to Jellicoe* (London: Royal Historical Society, 1981), p. 190.

加わった⁸⁰⁾。作業は秘密裏に進められるはずであったが、この企画はすぐ新聞に知られるところとなっている⁸¹⁾。

「海軍幕僚評価」の作成作業は1921年8月までには実質的に終了したが、その内容があまりにジェリコーに批判的と感じられたために修正が求められた⁸²⁾。校正作業等もあって、その完成は同年12月となり、翌年2月に校正刷り100部が印刷され、秘密文書とされた⁸³⁾。当初、この「海軍幕僚評価」には完全版と、いくらかの批評部分を削除した艦隊版 (Fleet Edition)、さらに批評を抑えた一般公開版の3種が構想されていた⁸⁴⁾。しかし、修正を経たとはいえ、やはり「海軍幕僚評価」はジェリコー批判を多く含んでおり、海軍部内での不和促進の恐れから公表は断念され、回収されることになった。

1922年にコーベットは急死したが、ジュトランド海戦を叙述した『海軍作戦』第3巻の原稿は完成しており、彼の死の翌年に出版された。しかし、この内容に海軍省は不満を示し、「その著作や記述の正確性については、いかなる責任も負わない」うえに、海軍省の見解と「本書で提唱され

80) ジョン・ポーレンは射撃管制装置の発明で知られるアーサー・ポーレン (Arthur Joseph Hungerford Pollen) の甥にあたる。'John Francis Hungerford Pollen,' *The Dreadnought Project*, <http://dreadnoughtproject.org/tfs/index.php/John_Francis_Hungerford_Pollen>. アーサー・ポーレンは、自らの射撃管制装置の全体的採用がなされなかったことから海軍省に批判的で、ジェリコーに対しても同様であった。彼は、ピーティー夫人エセル (Ethel Newcomb Beatty) を通してピーティーともつながっていた。From his wife, 12 May 1917, in *The Beatty Papers: Selections from the Private and Official Correspondence of Admiral of the Fleet Earl Beatty* (hereafter cited as *BP*), vol. 1, ed. Brian Ranft (Aldershot: Scolar Press, 1989), p. 242; Davison, *Challenges of Command*, p. 429. cf. Arthur Joseph Hungerford Pollen, *The British Navy in Battle* (New York: Doubleday, Page, 1919).

81) Roskill, *Earl Beatty*, p. 332; Schleihauf and McLaughlin, eds., *Jutland*, p. xxii.

82) Roskill, *Earl Beatty*, p. 333.

83) Dewar, *Navy from Within*, p. 266; Roskill, *Earl Beatty*, p. 333; Schleihauf and McLaughlin, eds., *Jutland*, p. xxiii. デュワーは自伝では「海軍幕僚評価」の最終的完成を1922年1月としている。

印刷された「海軍幕僚評価」100部のうち、現存が確認されているのは、No.1、2、4、7のみである。それらの事情については下記が詳しい。Schleihauf and McLaughlin, eds., *Jutland*, pp. 294-97.

84) Schleihauf and McLaughlin, eds., *Jutland*, p. xxiii.

ているいくつかの原則、特に決戦を求めて決着を強いることの重要性を軽視する傾向は、直接に対立する」との但し書きを挿入させている⁸⁵⁾。

ジュトランド海戦公式記録の問題はビーティーをはじめとする海軍省を悩ませる難問となったが、最終的に『ジュトランド海戦報告』が1924年に公表されることになった⁸⁶⁾。これは、ケネス・デュワーの監督下に、批評部分はとり除くが、なるべく原形をとどめるようにと命令されてジョン・ポーレン少佐〔退役〕が「海軍幕僚評価」を修正したものだ⁸⁷⁾。『ジュトランド海戦報告』は公表前に、当時、ニュージーランド総督となっていたジェリコーのもとに事前確認のため送付されたが、彼の強い反発を招いた。ジェリコーからの数多くの批判点に対し、海軍省は、再反論も注記した上でそれを付録G章 (Appendix published by request of Lord Jellicoe) として併録するかたちで『ジュトランド海戦報告』を出版した⁸⁸⁾。

こうして海軍省によるジュトランド海戦公式記録はついに公表されたが、その後もジュトランド論争は収束しなかった。たとえば、1925年にベーコン (Reginald Hugh Spencer Bacon) 大將は『ジュトランド・スキャンダル (*The Jutland Scandal*)』を著してジェリコーを弁護し、ビーティーを批判している⁸⁹⁾。特に1927年に出版されたチャーチルの『世界の危機 (*The World Crisis*)』第3巻は、ジェリコーよりビーティーを評価する傾

85) Note by the Lords Commissioners of the Admiralty, in *Naval Operations*, vol. 3, Corbett, 1st ed., front endpaper; Schurman, *Julian S. Corbett*, pp. 193-94. コーベットの『海軍作戦』第3巻については下記も参照。Andrew Lambert, "Writing the Battle: Jutland in Sir Julian Corbett's 'Naval Operations,'" *The Mariner's Mirror*, vol. 103-2 (May 2017).

86) ビーティーは、ジュトランド海戦の公式記録問題を、多くの利害関係が絡むだけに解決が困難な悩ましい問題だと感じていた。To his wife, 6 Mar. 1923, in *BP*, vol. 2, ed. Brian Ranft (Aldershot: Scholar Press, 1993), p. 242.

87) Director of Training and Staff Duties to DCNS & 1st SL, 26 July 1922, in *BP*, vol. 2, pp. 454-55; Schleihau and McLaughlin, eds., *Jutland*, p. xxv.

88) 拙稿「ジュトランド論争とジェリコー」(『国際学論集』第25巻1・2号、2014年12月)、19~20頁。Appendix G: Appendix published by request of Lord Jellicoe, *Narrative*, pp. 106-13.

89) Reginald Hugh Spencer Bacon, *The Jutland Scandal*, rev. ed. (1925; London: Hutchinson, 1933).

向の強いものだが、ジウトランド海戦で第5戦艦戦隊司令官だったエヴァン・トーマスによるビーティー批判を惹起し、論争を再び活発化させた⁹⁰⁾。同年に退役したハーパーも『ジウトランド海戦の真実 (*The Truth about Jutland*)』を出版し、ビーティーを批判している⁹¹⁾。さらには、この動きに刺激されたのか、海軍省もハーパー・レコードの公表に踏み切った⁹²⁾。

1927年にビーティーは海軍省を去り、替わってジェリコーと親しいマッデン (Charles Edward Madden) 元帥が軍令部長に就任した。そして、この情勢変化の下、海軍省は1930年に「海軍幕僚評価」の全廃棄を決定する⁹³⁾。1920年代を通して、「海軍幕僚評価」が大きな影響を及ぼしたジウトランド論争は、消長しつつも、その関係者たちから離れることがなかったのである⁹⁴⁾。

90) 拙稿「ジウトランド論争とビーティー」(『軍事史学』第50巻第3・4合併号、2015年)、203頁。Winston Leonard Spencer Churchill, *The World Crisis*, vol. 3, pt. 1 (London: Butterworth, 1927).

91) John Ernest Troyte Harper, *The Truth about Jutland* (London: John Murray, 1927).

92) Reproduction of the Record of the Battle of Jutland, Command Paper 2870, 1927.

93) Dewar, "Battle of Jutland," III, p. 146; Roskill, *Earl Beatty*, p. 334; Schleihauf and McLaughlin, eds., *Jutland*, p. xxiv.

94) ジウトランド論争の記憶は長らく尾を引いたようで、その影響は戦艦アンソンとハウの改名にもみられる。1930年代半ば以降に建造が開始されたキング・ジョージ5世 (HMS King George V) 級戦艦の4番艦アンソン (HMS Anson) と5番艦ハウ (HMS Howe) は、当初それぞれジェリコーとビーティーという艦名が与えられていたが、1940年に海相であったチャーチルがジウトランド論争を思い起こさせる名は望ましくないとしたために、改名されたのである。Nicholas Jellicoe, *Jutland: The Unfinished Battle* (Barnsley: Seaforth Publishing, 2018), p. 356.